



目次：

・第5回OMUP総会報告	常務理事 小股憲明 1
・第21回OMUPサロン報告	 2
・OMUPインタビュー 萩原弘子先生に聞く		
	インタヴュアー：小股 憲明 3
・自著を語る		
『自己愛スペクトル 理論・実証・心理臨床実践』三船 直子	 5
・石川 幸憲著『キンドルの衝撃』毎日新聞社 2010 を読んで		
	足立 泰二 5
・OMUP、大阪府大学術情報センターとの		
	リポジトリ連携に合意 5
・新顔紹介	 6
・編集後記	 6

第5回総会報告

常務理事 小股 憲明

去る8月7日午後2時00分から3時30分まで、大阪府立大学中もずキャンパスA14棟2F会議室において、特定非営利活動法人大阪公立大学共同出版会(OMUP)の総会が開催された。総会成立の確認、議長選出(理事長三田朝義氏を選出)、議事録署名人の選出(常務理事足立泰二氏、同小股憲明を選出)の後、平成21年度事業報告・決算、平成22年度事業計画・予算、その他が審議された。その審議概要は、以下の通りである。

1. 平成21年度事業報告及び決算報告についての承認

事業報告とあわせて、植田英三郎監事、田畠理一監事による会計監査により「適法かつ正確」であると認められた「収支計算書総括表(第3期 平成21年4月1日～平成22年3月31日)」、「貸借対照表総括表(平成22年3月31日現在)」、「財産目録総括表(同前)」が、満場一致で承認された(決算報告については表1参照)。

なお、植田英三郎監事から「業務の執行状況について」、以下の通りのご指摘を頂いた。

平成21年度は相当額の欠損を計上しており、今後の運営を見直すことが必要と思われる。収支改善策は本来、定時総会に平成22年度計画として提出されるべきものであるが、永年本出版会の運営に携わられた理事が、学外の職に就かれたこともあります。

現在検討中とのことである。体制の早期立て直しが求められるところである。

業務執行の中で特に「編集体制の強化」「HPを中心とする広報活動」「外部発注時の相見積もりの取得」については、理事会において「収支改善」「運営体制」と共に早急に検討頂きたい事項である。

表1 平成22年度予算書 (単位:円)

科 目	H21 決算額	H22 予算額	差 異
事業収入			
書籍売上	1,662,997	2,600,000	937,003
出版収入	3,465,815	4,530,000	1,064,185
々	5,279,022	6,300,000	1,020,978
寄付金収入	15,000	18,000	3,000
入会金収入	140,000	150,000	10,000
			0
その他の収入			0
受取利息	1,272	0	-1,272
雑収入	62	0	-62
当期収入合計	10,564,168	13,598,000	3,033,832
売上原価			
製作費	8,776,600	8,800,000	23,400
運送・発送費	54,747	55,000	253
編集デザイン料	670,000	700,000	30,000
期末商品	-1,977,777	0	1,977,777
管理費			
雑賄	1,646,000	1,700,000	54,000
業務委託費	595,718	600,000	4,282
旅費交通費	293,568	300,000	6,432
通信費	97,503	100,000	2,497
交際費	16,572	20,000	3,428
会議費	26,717	30,000	3,283
水道光熱費	17,940	20,000	2,060
著者精算	898,665	880,000	-18,665
消耗品費	0	0	0
租税公課	0	0	0
事務用品費	73,622	75,000	1,378
広告宣伝	179,300	180,000	700
支払手数料	52,638	55,000	2,362
新聞図書費	2,800	3,000	200
諸会費	9,000	9,000	0
法人税等	70,253	71,000	747
当期支出合計	11,503,866	13,598,000	2,094,134
当期収支差額	-939,698	0	939,698
前期繰越収支差額	4,723,299	3,783,601	-939,698
次期繰越収支差額	3,783,601	3,783,601	0

以上監事よりご指摘頂いた諸点については、一部はすでに総会・常務理事会において対応策を講じ、一部は対策を検討しているところである。

2. 平成22年度事業計画及び予算書

平成21年度予算は表1の通りで、平成22年度事業計画とあわせて、満場一致で可決された。

3. 役員の確認

本年は役員の改選期には当たっていないため、以下の全員が引き続き役員を継続することを確認した。

6. 緊急動議

①定款における総会の成立条件が、会員の過半数の出席（委任状を含む）となっている点を、会員の1/3又は1/4と改めること、
②会費について、現在入会金をもって終身会費としている点を、
毎年会費を徴収するように改めること、の2点に関する緊急動議について審議し、可決した。

ただし、具体的な総会成立の出席者数、毎年会費の額については、定款改正の認可庁と相談するなど慎重な考慮を要することから、常務理事会に一任することになった。

以上

第21回 OMUPサロン報告

大阪公立大学共同出版会（OMUP）の新刊本の著者を囲み、刊行に至るまでの経緯と思い入れ、エピソードなどをくつろいだ中で語っていただけた。第21回OMUPサロンは、平成22年8月7日（土）第5回総会の後、大阪府立大学 A14棟2階会議室で和やかな中、公開形式で、最近出版された本「Harmony of Nature and Science – The Nakamozu Garden Campus – 」（なかもずキャンパスの四季）の編著者、八木孝司先生（大阪府立大学産学官連携機構教授）にお話しいただきました。

原写真をコンピュータ映像でお見せいただきながら、自然科学者らしく、5W1Hの鮮明な記憶に基づく八木先生の説明は参加者に感銘を与えるものでした。さらに、まえがき、あとがきに述べられている和英の名文には先生の感性の発露を垣間見ることが出来、そのいきさつ等についても知ることが出来ました。話題提供の後、懇談会に加わって頂いた皆さん（報道関係者も含む）とともに、OMUP初のカラー写真集としての出版をお祝い申し上げたのでした。

なお、参考までにこれまで新聞紙上で紹介された記事を、本欄に搭載しました。 (文責 足立 泰二)

(文責 足立 泰二)

4. 業務契約等について

事務センターの電話秘書業務、杉本会計事務所の会計顧問契約、吉富賢太郎氏とのHPの維持・管理契約、事務局児玉倫子氏との契約は従来通り継続する。編集業務を強化するため、森田治子・木和田志乃両氏に責任編集業務を委託する。

なお、総会終了後、これまで足立泰二総務総括常務理事が担当していたHPの更新業務を迅速化・円滑化するため、吉富賢太郎氏に委託することとした。

5. 役員の報酬について

総務総括常務理事は毎週2回出勤の体制であるため、毎月若干の報酬を支払った。会計総括常務理事については、年度末に理事長が適當と認める報酬を支払うこととして、その額については新年度総会に報告することとなっているが、本期は赤字決算であることから、報酬は支払わないことが報告された。

OMUP インタビュー

萩原弘子(府立大学人間社会学部長)先生 に聞く

インタビュアー：OMUP 常務理事 小股 憲明



萩原 弘子 先生

はじめに

小股憲明 OMUP（以下Oと略記）：今日は大変お忙しい中、時間を割いていただきありがとうございます。

それからまた、今般、人間社会学部で出版助成の制度をお作りいただいて、ありがとうございます。早速その助成制度によって高木先生の英語の本が無事に出版されました－これはもう先生のお手元に届いていますか。

萩原弘子学部長（以下H）：はい、いただきました。高木さんのご本を早速に出していただき、ありがとうございます。

O：これデザインもいいでしょう。

H：おかげさまできれいな本になりました。

O：それから高垣先生の方も今年は科研費の出版助成が通ったということで、私どもの方から出版させていただけることになり、今進めています。それから、黒田先生と金さんの本も先頃完成了ところです。高垣先生のフランス語で書かれた本は、フランスの二つの大学が共同して作っている大学出版と、私どもOMUPとが、国際的な共同出版をするということで話が進んでいます。実は、前に出した村田京子先生のフランス語の本（学位論文）も、フランスの出版社と共同してフランスでの販売を引き受けもらったのですが、今回は出版そのものを共同で行うということで、出版の国際協力をいっそう進めた形になっています。

H：そういう場合は、ロゴマークが2つ付くのですか。定価もユーロと日本円とで表記されるとなると、OMUPもグローバルな

出版事業となりますね。

O：はい、せいぜい使っていただきたいと思います。人間社会学部の先生方がこれまでにOMUPから出版された本を、持参しました。いわゆる堺南大阪地域学の教科書としてつくったものです。よかったですこの部屋においていただければありがたいと思います。

H：ありがとうございます。

O：それから、学術情報センターが始めたりポジトリにも、契約を取り交わして、OMUPから出した府大の先生方の出版物は、電子書架に登載してよろしいということで契約をさせていただきました。

府大人間社会学部の出版助成制度について

O：市大の方々も私どもの出版会から学位論文などの成果を出版するということで、すでに3人が出版されました。「サラ・ベルナール」とか、「ゲーテの秘密結社」とか、若手の研究者、教員の皆さんですね。さらに今一件、引き合いが来ています。けっこう積極的にうちを利用させていただいている。今後とも、市大、府大で学位をとられた若い方々の学位論文の出版のお手伝いができたらと思っています。そういう意味でも、人間社会学部で創設された出版助成の制度は、予算とかのことでご苦労されると思いますが、できれば維持していただければ出版会としても大変ありがたいと思っています。

H：出版助成の制度をつくりたいというのは、小股さんからのご提案もありましたし、ずっと考えていましたが、具体化はけっして簡単ではありませんでした。特に経理面でハードルが高くて、制度の細部をつくって大学からゴーサインが出るまで大変でした。助成は無理かなと、諦めかけたときもありました。諦めずに可能性を追究してよかったです。

O：そうですね。これはやはり大学が、出版はそこのメンバー、スタッフの業績、研究の成果なんだという形で評価をしていただくということが大事です。

H：文系の研究者にとって、本を出すというのはとても大切なことです。

O：そうなんですよね。そこが理科系と全然違う。

H：全く違います。30代から本を書いて出して、という風にできるのがよいのでしょうか、昨今は学術的なものを出すのは出版社の敷居が高くて、なかなか難しいです。学術研究の成果を出版して、社会的に公表し、読んだいただく機会を増やすというのは、それこそ、大学出版の意義です。

O：そうですね、おっしゃる通りですね。実は、この出版助成も、本当は、人間社会学部単独ではなく、大阪府立大学としての出版助成制度を作っていただきたいなというふうに最初は思っていたんです。けれども、結局、理科系の人たちは、本を出すということの値打ちがわからないといったら失礼だけれど、価値

を置かれないんですね。なので、結局人間社会学部にご相談して、こちらで制度をまず作っていただいたということなんですね。

H：他の学部には、そういう助成制度はないですか。

O：ないんですね、要するにここの学部が皮切りというか第一号なんですよ。同窓会あたりがそういう出版助成制度を作ってくれるといいんですけどね。市立大学の方にも、こちらがこういう制度をお作りになっていますよということで働きかけてみたい。市大は文化系の学部が結構ありますから、ニーズは高いと思うんです。

学科の14人の先生方の執筆です。その次が府大経済学部のいざない本、2冊出ています。人間社会学部でも社会福祉へのいざない、人間科学へのいざない、言語文化へのいざないとか、そういうことをちょっとお考えいただいたらどうかと。それで、1回生の授業なんかに使っていただく。そういう一定の学問領域をオムニバスで紹介する授業科目もありましたよね。そういうとこのテキストで使っていただければ。

H：そういう科目はありますので、可能性はあるかもしれません。

O：授業で使って、何年間かで確実に何冊売れるという見込みがあれば、自費出版形式ではなくて普通の形での出版も可能です。生協でも、そういう意味ではかなり我々をバックアップしてくれる姿勢です。

H：「いざない本」シリーズの1冊を、1からつくるのはなかなか難しいですね。出版会の方で企画案みたいなものを作つてふってくださると、話が進むのではないかと思うか。

O：人間社会学部の先生方は、専門の論文はたくさんお書きになっているけど、こういういざないというような、特に大学の1回生ぐらいを意識しながら書いているものはないと思います。

H：この種の入門書というのは、重要だと思います。

O：そうですよね。入門の手ほどきをするのも大事なことだから、ぜひお考えいただけたらと思います。全分野に広めていきたいと思っています。本日はお忙しい中、長時間にわたってありがとうございました。お互いに協力し合って行きたいと思いますので、今後ともどうぞよろしくお願ひします。

H：こちらこそよろしくお願ひします。



小股憲明OMUP常務理事
2010年4月より大阪芸術大学
短期大学部教授に転任

Harmony of Nature and Science (なかもずキャンパスの四季)について

O：私どもOMUPと府大生協とで共同企画して本を作りました。

H：他の本とちがって、ずいぶん製作費用が高かったのでは見えますか。

O：カラーですからね、全ページ。でも、原価はさほどかかっていないのです。

H：キャンパスのお花や小鳥の写真がきれいですね。

O：全部が、教員がお撮りになったキャンパスの植物や動物の写真ですね。

H：本学を訪問された海外からのお客さまにさしあげるにもいいですね。キャンパスにはレモンの木もあるんですね。

O：目で見るとなんとなくこのキャンパス雑然としていると思うのですが、この本を見ると、なるほどこのキャンパスも捨てたもんじゃないと思える。

H：雑然というより、私は荒涼、殺伐という印象があるのですが、こうして写真で見ると動植物がちゃんと生きていてくれるんですね。

O：ただねえ、ここのキャンパスはこういう自然はいいんだけど、建物は悪いし、統一感はないし道路はでこぼこだし、どういう美的感覚の人がやってるんだろうと思うんだけど。オープンキャンパスのときどんな印象やった？と学生たちに聞いてみると、こんな汚い大学来たくないと思いましたって言うもん。

H：青大将がいますね。

O：狸も写っているでしょう。女子大にも狸たくさん出てたんですよ。僕は、女子大で親子の狸が歩いてるの何回か見ましたもん。女子大の狸は仁徳陵に住んでるんです。

「いざない本」について

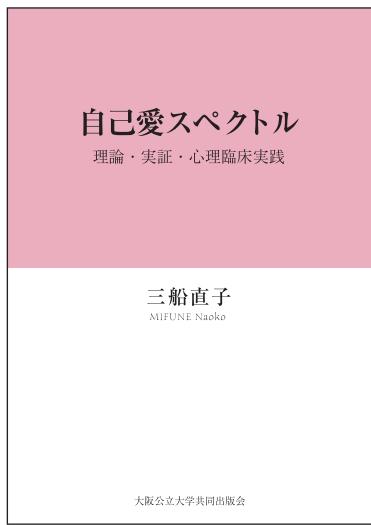
O：後ですね、学部長にちょっとご紹介しておきたいんですが、うちの出版会、これまでこういう「いざない本」というのを出してきました。まあ、顔が見える学問へのガイダンスといったものです。これは、市大理学部の『地球学へのいざない』です。



（以上その他、全国の大学出版会の現状と使命、欧米の大学出版会、OMUPに関するあれこれ、今次の府立大学改革についてなど、話題は多岐、長時間に及んだが、紙数の関係で割愛した。文責：小股 憲明）

『自己愛スペクトラー理論・実証・臨床実践一』

大阪市立大学生活科学研究科 三船 直子



本書は臨床心理学的な観点から「自己愛」の問題を取り上げ、理論的な検討と実証研究により「自己愛」の特質を探求したものです。筆者は心理療法を専門に行ってきました。長年、そのなかで出会ってきた人々から教えられてきたこと、そのなかで温めてきたテーマが「自己愛」でした。

心理療法ではセラピストとクライエント－治療者と治療される者－という二分法が単純に通用するものではありません。心理療法はセラピストとクライエントという役割を各々が引き受け、心理的な問題の解決や心の成長、苦悩の緩和を目指して対話を重ねていくプロセスと言うことができます。それは他者と出会い、自分自身と出会うこと、言い換えれば、他者の中に自分自身を見出し、自分の中に見知らぬ他者を見発していく中で結実していきます。このような双方向的な理解をつむぐ営みの中で、筆者は「自己愛」を「他者と自己が交わる領域」の重要な鍵概念と捉え、探求していったのです。

まずは、心理臨床の世界で言われている「健康な自己愛」と「不健康な自己愛」という区別に疑問を抱き、それについての理論的検討と実証的な研究（質問紙法による統計的研究）を行ってきました。これらの結果と臨床的経験から得られた知見を統合することによって明らかになった「自己愛」の特徴を「自己愛」の診断に資する「自己愛スペクトル」として提示したのが本書です。このスペクトルは自我状態、それが現われる領域、統計的研究から見出した自己愛の特質からなる3次元のスペクトルとなりました。さらにこのスペクトルを統合失調症やパーソナリティー障害などの臨床事例に適用することにより、各々のクライエントの、また各々の段階での「自己愛」の現われとその修復へのアプローチについて論を重ねていきました。

本書は私の20年余に及ぶ臨床実践とその研究のまとめだけではなく、書きながら考え、考えながら新らしいことに気づき、また新たな疑問に出会うことのできた時間のひとつの形となりました。

足立 泰二

アマゾンが2年前に売り出したキンドルはアップルのiPodの再来、とまで言われている。かつて電子書籍端末をいち早く商品化したのは日本だったが、ハードとソフトの合体を目指して、新しく開発された「電子ブック」は2010年が元年だと言う。著者は米国系通信社や雑誌社の記者体験を30年近くもっており、キンドルの登場を「ゲーム・チェンジャー」（試合の流れを一変させるプレー）になぞらえて、文字文化への衝撃は「革命的」だともいう。

まず、現在我々は文字文化の歴史的転換期に直面していること、情報のデジタル化による紙文化の危機だと、最近のアメリカでは「紙文化の終焉」とまで呼ばれているのだそうだ。「本屋をデジタル化したアマゾン」と言われるように、電子書籍端末キンドルがインターネットを通して販売実績を上げてはいると言う。しかし、その実態の詳細は明らかにされていないようで、確度は薄いようだ。

一方、大手出版社はデジタル化の流れをとっくに織り込み済みで、電子書籍端末市場が飛躍することは歓迎的にとらえているそうだ。しかし、末端機の規格統一化が、国際規格と言う名のもとに業界内の熾烈な占有競争にさらされていることも確かにようであり、またぞろ、アメリカン・スタンダードに踊らされざるを得ないのだろうか。

著者はインターネット創生期に電子版新聞のコンテンツを無料配信したことは取り返しのつかない決定的間違いだったとし、デジタル戦略を練り直す必要があるのだとも言っている。はたして、人間の精神生活を豊かにするのに、そのようなビジネスモデルを議論するような捉え方が出来るのだろうか。

著書はアマゾンという会社、米メディアの危機と彼らの生き残り戦略に論を展開し、米国新聞社が競ってキンドル配信に力を入れている実態も明らかにしている。

最後の章で、著者は「ペーパーレス読書文化の幕開け」と称して「デジタル文化はメディアをどう変えるか」の疑問を投げかけている。紙からペーパーレスへの推移は緩やかなものであろう、紙かペーパーレスかの二者択一ではなく、両者の共存時代が暫く続くだろうと結論付けている。

この本の読後感だが、この種の本が書店ではかなりの部数売れ、「読者受け」する現象そのものが、どうも我々には不可解であって、実のある豊かさを何ら感じさせない。その点、高価ではあっても貴重な研究成果、あるいは自己主張を一冊の紙媒体で世に問う、学術書、啓蒙書の将来性は決して暗くはない。我々が取り扱う、少部数発行のこれらの本はむしろ、電子書籍と相互補完的に文化的寄与を拡大するものと思われる。その際、最も慎重に配慮されるべきは、著者のオリジナリティー、つまり著作権に関するものでなくてはならないであろう。

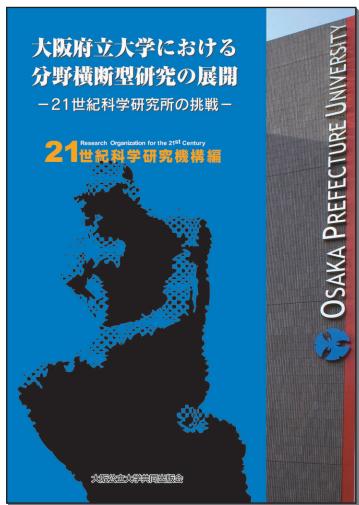
大阪府大とのリポジトリ連携に合意

去る、平成22年3月26日 OMUPと大阪府立大学学術情報センターは大阪府立大学の教育研究成果を広く社会に発信する目的で、当会の出版物を電子化し、リポジトリ（OPERAと略称）に搭載することで合意を見た。

合意文書は同学情センター長とOMUP理事長との間で取り交わされた。今後大阪府立大学関係者のOMUP出版物は、センターからの申し出によりOMUPが著者の了解を得た上で、OPERAサイトからダウンロード出来ることになった。なお、合意文書はOMUPホームページで見ることができる。

（文責：足立 泰二）

新刊書の紹介



**大阪府立大学における分野横断型研究の展開
-21世紀科学研究所の挑戦-**
大阪府立大学 21世紀科学研究機構編

大阪府立大学21世紀科学研究機構における学際的・分野横断型研究活動の一端を紹介。

ISBN978-4-901409-72-8

C3000

定価:本体価格 1,600円+税

A-5判 239ページ 並製本



ブックレット No. 29

子どもを育む暮らし方

小伊藤 亜希子・中井 孝章

共著

今日の子どもの生活事情、生活課題さらには地域生活についてアンケート・調査をもとに考察を加えている。

ISBN978-4-901409-75-9

C1336

定価:本体価格 800円+税

A5版 並製本、

新顔紹介

木和田 志乃（きわだ しの）
大阪公立大学共同出版会 編集担当



このたび縁あって編集に携わることになりました。数年前まで出版社に勤務し、書籍の編集をしておりましたが、しばらく編集業務から離れている間に、出版や印刷を取り巻く環境もずいぶん変わりました。戸惑うこともありますが、逆に新たな気持ちで仕事に取り組んでいます。微力ではありますが、よろしくお願ひいたします。

大阪公立大学共同出版会事務局より

大阪公立大学共同出版会は、大阪市立大学および大阪府立大学における教職員と、本出版会の趣旨に賛同する者の自主的な参加を得て、研究・研究成果の発表を助成し、また民間出版社において採算上刊行を引き受けないような優良学術図書の刊行頒布の事業を行い、学術の振興および文化の発展に寄与することを目的とし、

- (1) 会員の教科書および学術研究報告の刊行頒布
- (2) 会員の学術図書の刊行頒布
- (3) 会員のデータベース、ソフト等電子出版物の刊行頒布
- (4) その他前条の目的を達成するために必要な事業

などを行なっているNPO法人です。参加を希望される方は下記事務局へお問い合わせください。

599-8531 大阪府堺市中区学園町1-1

大阪府立大学中もずキャンパス内

NPO法人大阪公立大学共同出版会(OMUP)事務局

電話: 072-251-6533 ファクシミリ: 072-254-9539

e-mail: omup@hs.osakafu-u.ac.jp

URL: http://www.omup.jp/

入会金: 一口一万円(終身会費)

振込先: 三井東京UFJ銀行 中もず支店 普通 3976510

編集後記

ニュース性から見ると、いささか新鮮味に欠けるが、本年3月26日、大阪府立大学学術情報センターOPERAとのリポジトリ(電子書架)連携について協定締結をした。府立大学関係者の当出版会からの出版物はセンターからの要請があれば、全文がダウンロードできることになった。学術図書・論文としての主張を公表できる場が与えられたことに対し、会員の皆様と大いに喜びたいものである。今後、市立大学との協定構築にも努力したいものである。

時まさに、電子書籍の話題が沸騰している。発行部数の少ない学術図書の重要性が増し、大学出版会がもつべき責務が試されているものと思う。同時に大学の「品格」が構成教員の著述・出版物によって問われているとも言えよう。本号でのインタビュー記事に論じられている。

(TA記)